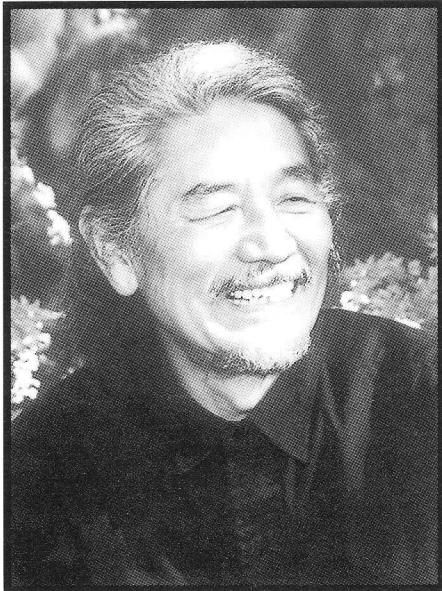


河口よ、お前もか…

昭和38年卒 田原嘉曙



河口 精二 平成18年6月21日病没
遺族 妻 朝子様

昨年(平成18年)6月21日昼過ぎ、用事を済ませて帰宅すると、『瀬川さんから電話で、河口さんが亡くなられた』と青天の霹靂の第一報。茫然自失とはこんな場合の言葉だろう。

河口があこの世に逝くなんて微塵も想像していなかった。最近会う度に真剣な眼差しで、『穴を掘ってその中で生活すれば120歳まで長生き出来る』と豪語していたのだから…。

東京の航空部の連中を集めて、何やら伊豆の方に土地を買い、穴を掘る準備をしていると言っていた。その嬉しそうな笑顔が忘れられぬ。

河口の笑顔、初めて会ったときから、はにかんだような、照れくさそうな独特の表情。無口では

あったが4年間の学生生活で、何となく彼の気持ちは何も言わなくても判るようになっていた。

大学での4年間、それは航空部を無くしては語れない。同期の連中との寝食をともにする付き合い。陳腐な言い方だが、「同じ釜のめしを食った仲」というのだろう。

その仲間の原と河口が逝ってしまった。心の中にポッカリと穴があいたような気持ちである。

原の場合は闘病生活を続けていたので覚悟は出来ていた。河口の時は全く突然であった。今でもまだ信じられぬ気持ちで居る。

告別式に参列した時も、式場の柱の陰から会場の方をニヤニヤ笑いながら見ているような気がした。

この歳になって、親友を二人も亡くすというのは、こんなに哀しいことなのか……。

日々の生活で、時々何かの拍子に二人のことを想いだす。そして、ああ、もう二人とは連絡しても駄目なんだと思うと、たまらなく寂寥感に襲われる。人の寿命に順番などつけられぬことは分かっているが、本当なら自分が一番先に逝くと思っていた。

40歳を目前にして闘病生活が始まった。30年近くの間体のあちこちから合併症に悩まされ、もう駄目かと何度も覚悟した。その自分が生きていて、思いもかけぬ河口があこの世に逝ってしまうなんて、世の中の不条理を感じさせる。誰が決めているのか知らぬが、人の命の不思議さをつくづく感じさせられる。

あとに残された人生、自分なりに楽しみ、しっかりと素晴らしい足跡を残せたらと思う。